

## 食と農をめぐる課題と食育

### ——愛知県安城市の農業者による食育活動を事例に——

名古屋文理大学 中村麻理

#### 1 目的

食育基本法が成立した 2005 年から 10 年以上が経過し、現在では食育推進基本計画も 3 期目に入っている。政策が登場した当初は、「食育」という用語自体が耳慣れないものであったが、すっかりあたりまえの言葉となり、食育を通じた様々な語りが消費者の日々の食行動選択に影響を与えるようになってきている。これまで政策としての食育に対しては、内容が曖昧である、分野に偏りがある、「国民運動」として展開するという推進体制のあり方等、様々な問題点が指摘されてきた。そこで、本報告では、食育政策の 10 年を振り返り、食育として取り組まれてきたことはいったい何だったのかを整理したい。そのうえで、具体的な事例として農業者による食育活動を取り上げ、食育活動と外部から位置付けられている活動に対し、活動主体自身はどのような意味づけを行っているのか、さらに、その活動が地域社会に与えている影響はどのようなものかを提示し、問題提起としたい。

#### 2 方法

報告の前半では、政策としての食育の 10 年をたどる。冒頭では食育とは何か、すなわち、食育基本法の内容や食育推進体制について確認する。これをふまえ、これまで 3 回にわたって作成されてきた食育推進基本計画を時系列的に比較するとともに、2006 年から全国各地で毎年開催されている食育推進全国大会における 이슈がどのように変化してきたかを明らかにする。報告の後半では具体的な地域事例にフォーカスする。まずは、地域における食育推進計画のバリエーションを捉えるべく、愛知県内の市町村の食育推進計画の比較を行う。報告者は 2014 年 8 月より現在まで、安城市において食育推進に関わる農業者グループのメンバー、および行政をはじめとする関係者を対象に、継続して聞き取り調査を実施してきた。そのうち今回は愛知県農村生活アドバイザー協会安城地区の活動に焦点をあてる。なお、本報告では、聞き取り調査によって得られた結果と、関連団体や行政の資料をデータとして用いる。

#### 3 結果・結論

食育推進における重点課題や 이슈は常に変化してきたが、食と農をめぐる課題に対する取り組みには依然として分野的偏りがある。市町村レベルでは、食育推進計画は基本的に食育推進基本計画に則ってはいるが、地域的な特徴もある程度あり、安城市の場合、「『農』ある暮らしを楽しむ～農と連携した食育の実践～」を基本方針のひとつとして掲げている。今回事例として取り上げた愛知県農村生活アドバイザー協会安城地区の場合は、食育活動として食育紙芝居や親子農業体験の提供を行っている。食育紙芝居を実施するのは、「まちなか産直市」においてである。「まちなか産直市」は安城市駅前において、農村生活アドバイザーグループが 2006 年から現在まで継続的に毎月行ってきたものであり、新鮮な野菜や花を求めて訪れる消費者との交流の場となっている。メンバーにとって食育活動はここで行う紙芝居であるが、行政からは産直市の開催そのものが地産地消の食育活動として位置付けられている。また、紙芝居の実施は、メンバーにとって食育活動というだけでなく、女性リーダー育成のための訓練という意味も持つ。地域社会との関連では、農村生活アドバイザーグループが地道に続けてきた産直市がベースとなって、イベントが次第に拡大し、今では月 1 回の歩行者天国が中心市街地で行われている。「まちなか産直市」の継続は結果として安城市の中心市街地活性化にもつながっていると考えられる。このように、地域における実践事例は、食育という言葉からイメージされる範囲を越えた内容を含んでいる。